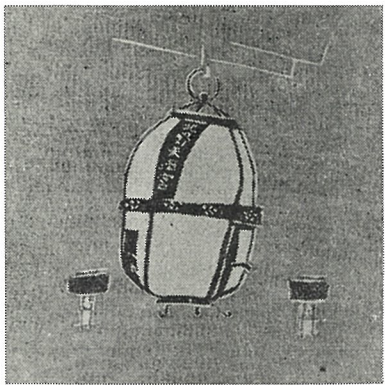

随想

風神讃歌

小野　哲

別に悪い意味ではなくて、人間を「けもの」だという。たとえば、ヴォルテールは、ルソーを「あなたの本を読むと四つ足で歩きたくなる」とからかった。しかし、よく観察するまでもなく、「けもの」というより魚貝に近い人間もいるし、草木・果実の感じの人間も多いように、天空を翔けることに夢中になる鳥のごとき性の人間も少くないのである。

同じ空を飛ぶものであるが、旅客機とグライダーの安全性は比較しにくい。F一〇四とYS一一の事故率が比較しにくいのと、また異った意味においてである。というのは、グライダースポーツにおける事故の多くは死を意味しないが、発航一万回に一回以下の死亡でも、それで危険度が少ないスポーツとは言い難いからである。

去る二月、田岡関学大教授の御子息の遭難は、利根川の河川敷におけるウィンチ曳航の際のピッチングに起因した。阪大の新造グライダーは、一月東京から飛行機で曳航中、伊賀の山中で視界不良のため不時着し大破した……等々。飛行前の整備・点検と搭乗者の技倆に問題がなくても、このように思いがけない事態が突如として発生する。飛行機もコワイが、グライダーもコワイというのは当然であり、また通常の心理でもあろう。

しかし、鳥のごとき性の人間にとっては、万一の危険は百も承知で、悠々と空が舞いたい。単独で空を翔けるその日への希望と、それが叶えられて空中にあるときの一秒一刻が、それまでの機材購入の長い経過と労苦、地上整備や教官同乗によるきびしい訓練の辛さを償うに足りると考える。

同志社の航空部員五〇名も、そうした気持から所有機イオラス（風の神）の申し子になった。幸い、監督の牧野鉄五郎OBの銀C章獲得は、その慎重細密な指導力に加えて良い刺戟にもなり、部員の安全を托するに充分な保証ともなっている。

若人と空とグライダーの因縁は、その危険さ、その道程の労苦、その訓練のきびしさの故に、かえって解き難く結びあっていると言えそうである。しかし彼らは、宇宙服を着てロケットにとじこめられる実験動物たることを欲しないし、軍用ジェット機における二十世紀の空のグロテスクな騎士をも志願しない。

彼らの願望は、自らの反射神経と自らの決断で充分操縦しうる低速の、しかし地上では得られぬ静謐の三次元の世界に、自由に軽ろやかに身を置くことである。

つまり、現代の機械文明の先端ではすでに失なわれている個人的自由の三次元的体感、即ち〈自由飛行〉こそが、古典的意味における「鳥人」の本望なのである。

だから、彼らとそして私も、ヴォルテールから「鳥のような人間」とか「風のような人間」とか言われて見たいのである。

（法学部教授・政治学・体育会航空部長）

巴里に切腹す

店村新次

フランスで驚いたことの一つは、未だに一般のフランス人が日本について殆んど知っていないという事実である。一般のフランス人というのは大学教授だの博物館長だのという知識人をも含めての、つまりは大多数のフランス人である。勿論むこうにも大変な日本通というのもいるし、すぐれた東洋学者もいる。しかしこれは極く少数の特殊な例であって、この人々の紹介するものが一般に読まれたり理解されたりしていると思ったら大間違いである。カメラやトランジスターが進出しているから……浮世絵や俳句がむこうに影響を与えたから……などと考えるのは専ら我々の勝手な独りぎめに過ぎない。彼らが大平洋戦での日本の悪名を知らぬ訳ではない。ただ丁度その頃彼らは自分たちの戦争のことで忙殺されていたことも事実なのだ。では彼らにとって日本はどのような国であるのか。これを一言でいうと、先ず第一に「日本は遠い国、あまりにも遠い国」なのである。東京からパリまでジェットで十七時間で来たのだと言って聞せても、彼らは決して日本が近くなったとは思わない。ただジェットの偉力に感心するだけである。オリンピックがあるのだが来ようとは思わないのかと聞いても、ただ途方にくれた笑みをうかべるだけである。よもや自分が日本というような国に行くことになろうなどとは思っても見ないようである。京都の日仏会館に来ているフランス人が、日本に赴任ときまった時、家族会議をひらいて一晩中思案したというが、さもあらんと思われる。パリで荷物を日本に送るとき、毎回、鉄道の係員が肩をすくめて「ホホウ、日本！　ホホウ、日本！」といって笑う。何がおかしいんだ、日本に小包を送ったことがないのかと聞くと、いや送ったことはある。しかし「ホホウ、日本！」なのである。そして地図を出して来て、あなたは日本のどの島に住んでいるのかと興味深げに聞く。因みに同志社大学は日本の一番大きな島に存在する訳だ。島といえば、最近「裸の島」という映画がヨーロッパで非常なあたりをとった。この映画の与えた感動は大変なものだったらしい。これが日本紹介のチャンピオンである。大低のフランス人は見ている。そして「日本にはあのような不便な島が無数にあるのだろう」と思っている。なにしろむこうで出版されている日本紹介の本は首をかしげるようなものばかりである。挿画は支那の美人画だし、記事も「日本人は挨拶するとき、数十回頭を下げる。そしてその一回毎に異った定り文句を一つづつ、相手の言葉には関係なく発音する」などと書いてある。京都の老婦人などの挨拶はその通りに違いはないのだが……

彼らにとって日本は余りにも遠い国なのだと言った。この遠いという距離感はただ

に空間的距離感ばかりではないようだ。その証拠に彼らはヴェトナムを遠いとは思っていない。ゲイシャや人力車や切腹という言葉から漠然と彼らの心に形づくられている日本のイメージは、精神的にもあまりにも縁遠い、理解しがたい遠さとなって感じられているのだ。彼らにとってまだ日本は伝説の国なのである。あるとき、二人の女の先生が長い間躊躇した末に、勇を鼓して私に質問してきた。

「あなたでも、面目を失ったときにはやはり切腹なさいますか?」

（商学部教授・フランス語）

ある作曲家の思い出

中瀬古　和

「たといわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく」（コリント人への第二の手紙第四章第十六節）

昨年の暮に旧師パウル・ヒンデミットは六十八才で永眠された。その近作のオペラ「長いクリスマス・ディナー」が二月に上演されたので、追悼の心をもって会場に行った。

私が教えを受けたのは、彼が新らしい一派をなす作曲家として欧米楽界の注目を浴びている時であった。そしてまたこの才気溢れた三十何才かの作曲家は、目まぐるしい創作活動のかたわら、後進を指導することが作曲家に課せられた責任の一つであると考えて、独自の方法で学生を指導しており、やがてそれは彼の理論として確立された。古くからの音楽の伝統を誇るドイツで、伝統を超えた理論を立て、新らしい教授法を国立の音楽院でやってのけることはどんなに大胆な行為であったかと、今にして思うのである。鋭い、けれどもいたずらっぽさをもった眸、小柄なよく動く体、それは精悍という言葉の見本のようであった。

プログラムに載った半ば逆光線の中に指揮する老人の写真――それは選りにも選ってまずい写真だと近年の彼を知っている人はいうが――そこにはもうあの鋭い眼光は見られなかった。その無常感はオペラを聴いても消えなかった。そこに完成したものの悲哀を思った。技巧と思わせないまでの技術の完璧の域に若くして達してしまったために、始めて或るものに到達する時のみづみづしさをどの作品にも留めておくことが無理だったのであろう。創作する者にとって、自分の過去の傑作の壁が立ちはだかっていることはどんなに苦しいことだろう。ヒンデメットはバッハ歿後二百年祭の記念講演で、バッハの晩年の寡作を、人間としての能力の絶頂に登りつめたためと解釈している。それはヒンデミットにして、或る実感をもっていえることであろう。彼の代表作の一つであるオペラ「画家マチス」（一九三四）の作詞は作曲者自身によるものであるが、老いた画僧マティアス・グリューネヴァルトが画業成って命の終りに近いのを知って、筆を収めて立ち去るところで幕が降りる現代作曲家として名声の絶頂にあった時に、既にこうした完成の悲しみの予感を持っていたのかと、十年近く前にこのオペラを聴いた時に何か悲壮な気持に打たれたことを思いだす。

八十才を超えてなおも変容を続けているストラヴィンスキーの近作には、私はどの

曲にも完全について行けるとはいえない。ある曲は比較的早く、ある曲は数回聴いた後に、急に啓示を受けでもしたようにはっきり把握することができる。またある曲は未だに疑問のまま残っている。

信仰生活ばかりでなく、すべての精神生活において「日ごとに新しく」されたいものである。

（女子大教授・音楽）

西陣と私

松尾弘子

西陣ということばには一つの響きがあります。格子戸に象徴される暗さ、こんなものが世間一般の定義でもあるようです。京都では祇園・本願寺そして西陣には手をつけるなといういい伝えもあるようです。同志社大学を卒業して、はじめて出る社会に、西陣を選んだ私は、この不可思議なところに、我れながらビックリしたのでした。月日がたつにしたがって、西陣が、とうういっぺんの定義で片ずけしまわれるものではないことを知りました。勿論、私の仕事が西陣織のPRを担当する広報課ということも手伝って、今日まで、西陣を世間一般の人たちに正しく理解してもらうよう努力してきたつもりです。

たしかに、西陣には伝統産業特有の悩みがあります。しかし、これは時の流れとともに、それなりの努力や苦しみを背負ってきているのです。格子戸がビルに変ってきたという事実だけではないのです。織屋さんと呼ばれる人たちの経営者としての意識も一段と向上し、織手さんは「ウイバー」といわれて、大企業なみの賃金を得る人も増えてきています。西陣で最も大切なことである織屋さんの美的センスは、伝統に培われたガッチリとした土台の上に近代的感覚をとり入れ、見事に西陣のオリジナリティーを発揮させています。これらは芸術的な領域に属するものといっていいでしょう。

西陣を宣伝する私にとって、もっとも、有利な武器と考えたのが、写真でした。全国の人々に視覚を通して西陣を紹介するとこそ、最良の方法だと信じたその日から、ファインダーをとおして西陣の隅々まで一生けん命写真にしました。一方では、西陣のある京都の美しいたたずまいを紹介してゆきました。いうなれば、京都の西陣であり、西陣は京都にあるという強味を感じたからです。

西陣グラフというPR誌によって、私の考える西陣や京都が、全国に流れ、毎月、読者の方々から激励のお便りを受取るたびに西陣と私のつながりが深くなってくるのです。毎日といっていいほど撮影に飛び回っていますが、京都ほど短時間でいろんなところへ行けるところは少ないでしょう。そして、すべて歴史を秘めています。その中にあって、西陣は活動しているのです。オリンピックをひかえ、世界のきものとして、その優雅さが認められると同時に、世界のファッション界では貴重なマテリアルとして注目されてきているようです。

私がレンズをとおして、吸収してきた西陣は今、世界のニシジンとして伸びようとしているのです。これからも、私自身の内面を深めながら、西陣を愛してゆきたいと思っています。

（昭和三二年大社卒・西陣織物組合勤務）